

抗菌薬の反復使用で糖尿病リスク上昇

腸内細菌叢は代謝経路に影響を与えており、肥満やインスリン抵抗性や糖尿病の発症機序にも関係している。抗菌薬は細菌叢の変化をもたらすが、欧米では頻繁に使用されている。本研究では、抗菌薬の反復使用が糖尿病リスクを高めるかを検討した。

英国の大規模データベースから、20万8,002例の糖尿病患者と81万5,576例の年齢、性別、追跡期間等をマッチングした対照患者を抽出し解析した。その結果、1クール of 抗菌薬の処方では糖尿病リスク上昇との関連はみられなかった。ペニシリン系、セファロスポリン系、キノロン系、マクロライド系の抗菌薬を2クール以上された患者で糖尿病リスクが上昇した（調整オッズ比：1.08（ペニシリン系）～1.15（キノロン系））。抗菌薬投与の期間が長いほどリスクは高くなり、5クール以上ではキノロン系で1.37倍にまで達した。抗ウイルス薬や抗真菌薬では糖尿病リスクの上昇と関連は認められなかった。

したがって、特定の抗菌薬を繰り返し使用することにより2型糖尿病リスクが上昇することが示唆された。

出典：European Journal of Endocrinology. Published online Mar 24, 2015;

pii: EJE-14-1163